JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	しまねアカデミアという挑戦2 : 共創を育むプログラムの開発に向けて
Author(s)	安藤, 二香; 田原, 敬一郎; 岩瀬, 峰代; 吉澤, 剛
Citation	年次学術大会講演要旨集, 33: 746-749
Issue Date	2018-10-27
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/15569
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

２Ｇ２２
しまねアカデミアという挑戦2 ―共創を育むプログラムの開発に向けて

○安藤 二香（科学技術振興機構），田原 敬一郎（未来工学研究所），
岩瀬 峰代（島根大学），吉澤 剛（オスロ都市大学）

1. はじめに

現代社会が複合的な社会問題に直面する中で、解決に向けた活動や施策が各所で展開されている。社会的企業、市民社会組織、そして大学をはじめとするアカデミア、あるいはサイエンスコミュニティもその例外ではない。しかしながら、日本の大学は、教育・研究・社会（地域）貢献という 3 つの役割をどれほど果たせているのだろうか。あるいは、国の科学技術政策では、社会問題の解決に向けて多様なステークホルダーとの対話・協働による共創的イノベーションの推進を掲げているが、超学際研究に取り組むことができる環境が整備されてきたのだろうか。

しまねアカデミアは、大学や組織の枠を超えて超学際的な研究活動を育みながら、大学の持つ 3 つの役割を一体的に実現しようとする運動である。2017 年から構想を育み、これまでに研究集会を 2 度開催した。その成り立ちや第 1 回研究集会（2017 年 8 月）については、2017 年度の本学会年次学術大会にて報告を行った（吉澤ら 2017)。その後の活動により、2 つのテーマでプロジェクトが立ち上がりつつある。本報告では、第 1 回研究集会後の活動と第 2 回研究集会の開催を通して、2 つのテーマがプロジェクト化する過程を紹介するとともに、それらを通して見えてくる共創を育むプログラム開発の可能性や課題について議論する。

2. しまねアカデミアについて

しまねアカデミアは、研究、教育、社会（地域）貢献を有機的につなげ、地域経済・社会・文化に資するよう、全国の研究者やその家族、クリエイター、地域住民などが無理なく継続的に関われる仕組みを目指す新たな運動である。多様な分野の専門家や地域のステークホルダーを集めた超学際的な研究集会、着地型観光などを組み合わせ、参加者の知識交流を深めるとともに新たな共同研究やイノベーションにつながる着想を持ち帰ることができる場づくりと長期的な関係構築を行う。現在は島根を舞台に具体的な地域課題をテーマとしたプロジェクトを進めているが、将来的には他地域でも「○○アカデミア」が展開していくような共創を育む装置としてのプログラム化を目指している。

2017 年 3 月から島根で「アカデミア構想」を実現できないか、地域のステークホルダーや研究者へのインタビューを重ね、同年 8 月に第 1 回研究集会を奥出雲町及び雲南市吉田町で開催した。第 1 回は、1)地域課題から新しい学際的な研究のアイデアを生み出し、地域の人たちと関係性を構築するためのワークショップ（WS)、2）子どもたちを含めた地域住民参加のアウトリーチイベントと交流会、3）対話型エクスカーションの 3 つの柱で会を構成した。いずれも、研究者や地域の人たちが双方向で対話・知識交流することを意図してデザインし、特に 1)は超学際(トランスディシプリナリ、TD)研究の co-design 部分に相当するものである。奥出雲町では、全国各地で問題となっている鳥獣被害と狩猟をテーマに、自然との共生や持続可能な地域についてのアイデアを出し合った。参加者 30 名のうち、地元の人が 15 名であった。また、吉田町では、ダークツーリズムと持続能な開発のための教育（ESD）という切り口で、たたら製鉄を活用した新しい観光のあり方を考える WS を行った。参加者は 22 名で、地元が 9 名であった。その結果として、「生業学校」及び「比較神話学」プロジェクトのタネが浮かび上がった。

その後、2 つのプロジェクトのタネを育むため、インタビューや小規模の研究会、打ち合わせを重ねた。その過程で、具体的な課題を発見するとともに、新たなステークホルダーの参画があった。2018 年 8 月 20 日から 22 日にかけて開催した第 2 回研究集会では、2 つのプロジェクトを具現化することを目的とした WS とエクスカーションを中心に構成した。また、子どもを含めた研究者家族向けのツアーとして、特別天然記念物であるオオサンショウウオの生態観察ツアーを行った。いずれも、しまねアカデミアの世話人である報告者 4 名のみならず、地元の方々、研究者らが企画段階から関わることで実現したものである。

3. 生業学校プロジェクト

第 1 回研究集会において「狩猟と鳥獣被害」という切り口で、地域社会と自然との共生に貢献できるアイデアとして生まれたプロジェクトである。その後も地元関係者と対話を重ねたが、2018 年 5 月に地元ハンターの山本洋紀さんと共に岐阜県郡上市の里山保全組織「猪鹿庁」を訪問することとなった。鳥獣被害対策やジビエ利活用の取り組みや課題についてうかがうとともに、島根県の鳥獣専門調査・指導員である梶誠吾さんを紹介いただいた。それらを通して、鳥獣被害対策もジビエ利活用も担い手不足が深刻であり、職業猟師のみならず、色々な人が持続的に関わることができる仕組みの必要性が浮かび上がってきた。

そこで、第 2 回研究集会（8 月 20 日午後）では、地域を巻き込みながら被害の原因を把握し対策を立てるための「集落環境診断」を実施し、新しい解決策を探る WS を開催した。集落環境診断では、（株）うちの子も夢中です社長であり NPO 法人ただも理事長である大塚一貴さんの協力の下、参加者およそ 15 名が実際に農場を見て回り、山本さんや梶さんの解説を聞きながら被害やその原因について調査を行った。その際、生き物の生息地を人工知能と集合知で特定・共有する「iNaturalist」という市民科学のためのツールを用い、地図上に被害等をマッピングしていった。WS では、鳥取大学工学研究科助教で（株）レヴィ共同創業者・取締役の三浦政司さんより、鳥獣捕獲罠の技術的可能性について話題提供いただき、その後に研究者と地元の方々混成の 3 グループに分かれて議論を行った。地元住民のみならず、都市部の一般市民も巻き込めるような実用的なアイデアが出され、プロジェクトの形が見えてきた。

4. 比較神話学プロジェクト

本プロジェクトは、CODAMA（Citizen Oriented Digital Archives of Mythology and Archeology）という名前がある。直訳すると「市民に根ざした神話学・考古学アーカイブス」となるが、研究のための研究ではなく、地域で暮らす人々が大切にしているものを守りながら研究者と地域の人々が一緒になって取り組もうという想いを表したものである。このプロジェクトは、第 1 回研究集会のフォローアップとして 2017 年 11 月に世話人が奥出雲町を訪れた際に、奥出雲町教育委員会の宍戸俊悟さんから何気なく出された「比較神話学」というキーワードがきっかけで始まった。2018 年 3 月にプレ WS を開催し、「奥出雲町を中心とする出雲神話と現代」と題した話題提供の後に、当時島根大学人文社会科学研究科の学生で現在は島根県古代文化センター特任研究員である面坪紀久さん、島根大学人間科学部准教授の高見友理さんらが発表し、文化人類学や歴史学、臨床心理学をはじめとする学際研究の可能性が広がった。その後、世話人の地元で神話とゆかりのある宮崎県高原町とのつながりや、国際的な視点から見た出雲神話の特徴、新たな観光資源の発掘などの検討に向けて、新たな研究者の巻き込みや観光業、神話や神楽に関わる地元関係者へのアプローチが行われた。第 2 回研究集会の 2 日間（8 月 21 日、22 日）を本プロジェクトの時間とし、神話を巡るエクスカーションとキックオフイベント、メンバーによる研究会の企画を関係者間で対話をしながら創り上げていった。

まず、21 日は午前から午後にかけてエクスカーションを実施した。奥出雲教育委員会の宍戸さんを中心に、観光資源としては見過ごされそうな場所をある種の仮説・ストーリーを持ってツアーを組み立て、研究者や地元関係者 20 名超が共に巡った。ガイドが一方的に説明をするのではなく、参加者が対話をしながら、観光資源としての価値の発見や、歴史的に見た神話の再解釈の可能性など、多様な視点・立場から気づきを得られるよう工夫を行った。

その後、地元関係者を更に加え、プロジェクトのキックオフイベント「未来社会の神話学～綴り 繋ぎ 紡ぎ直す 神々と地のものがたり」を開催した。研究者を代表して島根大学人間科学部講師の佐藤鮎美さんより趣旨説明を行った後、話題提供を 4 名が行った。まず、奥出雲町教育委員会の宍戸さんと、宮崎県より高原町教育総務課の瀬戸口洋介さんが、各地域にまつわる神話について紹介した。続いて研究者からの話題提供として、オックスフォード大学人類学・博物館民族誌学部に所属する中分遥さん、クリストファー・カバナさんが、「土着性と普遍性の再発見：デジタル化と統計解析が切り開く新たな神話学の構築に向けて」、「日本の物語の反直観的な概念のコーディング（邦訳）」と題して話題提供を行った。民話・神話のアーカイブデータからどのような分析が可能か、比較分析をすることで地域性や普遍性を再発見できる可能性などについて紹介があった。その後、フィッシュボウル形式で全体ディス

カッションを行い、このままでは廃れてしまう神話や、そこに埋め込まれた土地を生き抜くための知恵などをどのように未来へ伝えていくか、伝統を守ることと伝承すること、その課題などについて議論がなされた。最後に、雲南市吉田町で活動する（一社）スクナヒコナ代表理事の浜崎浩さんが締めくくった。

22 日午前中は、プロジェクトを具体的に進めるためのグループディスカッションを実施した。今回、初参加のメンバーもいることから、なぜこのプロジェクトを行うのかという本質的な問いから始め、研究者や地元関係者など多様な参加者間で共有しうるプロジェクトの価値を探った。その上で、プロジェクトの具体的な進め方や実施主体などを全体で議論した。

研究集会後には、参加者が自発的にデータのやり取りやミーティングを開催するなどの具体的なアクションがなされている。また、世話人を中心に本プロジェクトのロジックモデル（素案）を作成し、全体の方向性や各取り組みのつながりを可視化するよう努めている。

5. 議論

5.1. 共創を育むには何が必要か

前述の通り、しまねアカデミアでは既存の組織の枠を超えて多様なステークホルダーの共創を育み、研究、教育、社会（地域）貢献の一体的な実現を目指している。これまでの 1 年半の活動を通して具体的なプロジェクトが立ち上がりつつあることは、一つの成果と言えよう。特に比較神話学プロジェクトでは、世話人のみならず、地元関係者や研究者が自発的に企画を考え、また巻き込むとよいアクターを提案しあいながら進んでいる。これまで、各所で対話の場づくりがなされてきたが、単発のイベントで終わってしまい、実際にプロジェクトの立ち上げまでは至らず、ワークショップ疲れといった声も聞こえてくる。今回の取り組みで、共創を育むには継続的な対話が必要であることを改めて実感した。

また、研究集会の企画立案の過程も含めて、アジェンダセッティングの段階から対話することの重要性がうかがえた。ステークホルダーが広がるほど、多様な価値観や利害の衝突が起きることが予想される。研究者と地域の人々にとっての関心事や価値、時間感覚が異なる上に、学問領域の異なる研究者間での方法論の違いや、地域の人々の間での利害や関心事も異なる。そのため、第 2 回研究集会では、プロジェクトの本質や課題設定を問い直すこと、そして新たな視点を付加しバージョンアップさせていくこととした。それと同時に、いつまでも課題設定にとどまっていては具体的なアクションにつながらず、参加者のモチベーションを維持することが難しくなるため、全体として対話をどのようにデザインし、ファシリテートしていくかが課題であった。利害の衝突が予想あるいは顕在化した場合には調整も必要である。これらのことから、共創を育むためには、対話のデザインやマネジメントの知見・経験を蓄積していくプログラムとプログラムマネージャーの育成が重要であると考えられた。

また、多様なステークホルダーを巻き込むといっても、誰でも良いわけではない。研究者の資質や利害関係、信頼性などをある程度把握できれば、無用な衝突を回避することにつながる。また、社会問題の解決を目指すエコシステムを考えた場合、ソリューションを生み出す者と、それを活用するエンドユーザーに加え、ソリューションを様々な社会システムに組み込みエンドユーザーに届ける担い手が必要となる。しまねアカデミアの 2 つのプロジェクトを見てみると、生業学校プロジェクトではソリューションを届ける担い手がまだ見えていないが、比較神話学プロジェクトでは複数の担い手候補が参加する状況となっている。研究者の多様性ということでは、一見すると多様性があるように見える比較神話学においても、自然科学や宗教学、地政学など、厚みを増すと良いと思われる分野がいくつもある。現状では、参加者の個人的なネットワークを元にステークホルダーを探索し巻き込みを図っているが、各地で、様々なテーマで共創を育むためには、人や組織の情報をより効果的に収集する仕組みがあると有用であると考える。欧米の民間財団では、財団間や NPO 等の中間組織とのネットワークと情報交換が盛んであるという。一朝一夕で作れるものではないが、共創を育む基盤としてプログラムに必要な機能ではないだろうか。その意味で、今回の研究集会に日本の民間財団の関係者を巻き込むことができたのは重要な前進である。

共創に関心を持つ人材の層を増やすことも重要と考える。しまねアカデミアに参加しているメンバーの中で、これまでに共創的なプロジェクトに参画した経験のあるものは決して多くない。そのため、実際にプロジェクトを進める中で、参加者が共創を体感し、課題にぶつかりながら学ぶこととなる。研究者の中には、現実の地域社会というフィールドを持たずに研究を行う者や、学際的な研究の経験がない

ものも少なくない。研究者・地域の人問わず、研究と実践を線引きしてしまう者もいる。そのような中では、プログラムマネージャーがいかに共創を促そうと工夫を凝らしても、限界がある。そのため、中長期的には、共創の事例を蓄積するとともに、そこから共創について学ぶことができるようなケース教材を作成し提供するプログラムの開発も有用ではないか。人材育成に関して、しまねアカデミアでは社会的課題の発見や研究の実施・アウトリーチにおいて地域の学生・生徒をこれまで十分に巻き込めていないという反省がある。このためには広域的な行政や学校の関与と協力が不可欠であり、時間や資源が非常に限られている学校関係者とどのような継続的な関係を築き上げていくかを検討しなければならない。持続可能な開発のための教育（ESD）と平仄を合わせたり、他の地域関係者とも協働しながら若い世代への訴求を続けていきたい。

5.2. 今後の展開について

第 2 回研究集会で得られた具体的なアイデアや課題を踏まえ、2 つのプロジェクトを推進していく。同時に、2 つのプロジェクトが進展する過程を観察・分析しながら、多様なステークホルダーが豊かな関係性を育み、活動だけでも、また研究だけでもない問題解決への貢献や、新たな価値を創造する場や方法についていて知見を重ね、しまねアカデミアというプログラムの発展につなげていきたい。これまでの活動資金の多くは研究資金と各人の持ち出しであったが、今回は民間財団からの支援も受けることができた。事業者や起業家の参加も実現したことから、今後はプログラムの継続的な運営に必要な資金の多様化を目指していく。また、プロジェクトの担い手や地域におけるリエゾン的な関係者が、個々のプロジェクトの達成に向けて動くばかりでなく、プログラム的視点を涵養し、新たな世話人としてしまねアカデミアという運動を引き継いでいくことが期待される。そのことでプロジェクトとプログラムの断絶が解消され、参加者全員がそれぞれ自分たちなりのしまねアカデミアを定義し、自分ごとのプログラムとして展開していくことができるだろう。

謝辞

しまねアカデミアは、JST プログラム・マネージャー（PM）の育成・活躍推進プログラム「共創的イノベーションのための方法論と人材基盤の構築に向けた検討」プロジェクトと連携して進められた。また、第 2 回研究集会は、東芝国際交流財団の協力を得て開催した。企画運営にあたっては、一般社団法人スクナヒコナほか多くの現地の方々の協力を得た。ここに深く感謝申し上げる。

参考文献

・ 吉澤剛・岩瀬峰代・田原敬一郎（2017）「しまねアカデミアという挑戦：学術界の革新に向けて」研究・イノベーション学会年次学術大会講演要旨集，32：750-754.